

目的 母性喪失現象の顕現化する現代において、母性の育成と女子教育の相関を再考し、あわせて、近代育児思想史としての研究を目的とする。

方法 女子教育を意識的、急進的に推進した明治中期に出版され、当時の代表誌として著名な『女学雑誌』を基礎的研究資料とし、第3報は、思想的弾圧と干渉に明け暮れた明治25年から、日清戦争が勃発した明治27年までを一区分とし、当時の社会情勢、女子教育論を背景に、母性の啓蒙と育児観を考察した。

結果 ①明治25年代—教育勅語発布以来、ナショナリズム思潮高揚の中で、ドイツのヘルバルト流教育が導入され、国民教育達成の命題のもとに、小学校の教科書検定基準が強化された時代。女子教育も西洋風が弾圧される中で、育児論は学問の無い母は其の愛子を養育するどころか、その能力までも殺してしまうと説く。

②明治26年代—女子教育を促進するために、小学校に裁縫教師を置いて、実用と徳育を奨励し、同時に武道の必要性が強調され、かたわら女学生自身による女子高等教育に対する勇気ある発言が見られる。児童については家庭保育の重要性と共に、それを補う幼稚園の集団保育の必要性が説かれ、愛国の気風養成が強調され始める。

③明治27年代—管理体制は更に強化され、国家の急務として貧困児童のための工部授業や、定業教育が奨励されて来る。その中で米國フオラム雑誌に寄稿されたクリスマンのペイドロラーが紹介され、1新科学としての設立と、女子教育への導入が熱心に説かれ、小児の保育・訓育に一大改革をもたらし、学校教育こそ国家的使命であると説く。